

## 1・十三年前の約束

※全体的に間を長めにとって、緊迫感を演出して下さい。

十三年前の冬の日。時間は夜。

『本当の姿』のトワと、さとりの二人が、誰もいない公園で対峙している。

どうやらここは、トワにとって、主人公と一緒に訪れた思い出の場所らしい。

トワは主人公のもとを去る前に、もう一度ここへ来たかったようである。

辺りには、冷たい風がふうふうと吹いている。

そんな中、さとりは立った状態で、石造りの遊具に座った……いや、乗った状態のトワを見下ろしている。

対するトワは、一見小さくうずくまっている。

しかし、さとりには、トワがまだ充分余力を残しているように感じられる。

さとり、トワについて次のように考える。

トワと同じ生き物は、現在地球にトワしかおらず、トワは現状、一人では生きていけない程度には弱い生物と考えるのが妥当である。

だが、それはトワが主人公に恩を感じているために『無害な弱い生き物』『地球に危害を加えない善良な存在』を演じているだけなのかもしれない。と。

さとり、トワのことを内心『下手に刺激したら何をするかわからない。食えない生き物だ。油断はできない』と感じている。

SE1…【20秒ほど】外の環境音。ふうふうと風の吹く音。さとりのセリフが始まるのと共に風の音は小さくなるが、トラック中ずつと流れ続ける

〈さとり〉

「……ねえ。あの子のことが好き？」

〈トワ〉

※加工した声

「す、き」

トワ、返事をする。『あの子』とは、主人公のこと。

さとり、トワの話す言語を完全に把握しているわけではない。

しかしトワが『好きだ』という主旨のことを言っているのは理解する。

〈さとり〉

「……そう。そうよね。」

【「わかり切っていることなので、さほど興味なさそうに」

まあ、そんなの、聞かなくてもわかっていただけれど」

七秒ほど沈黙。風の音だけが聞こえる。

〈さとり〉

「じゃあ、質問を変える。

貴方、私に利用される気はある？

その希少性を私達に捧げる代わりに、この星で生きていく気はある？」

〈トワ〉 ※加工した声

「選択肢、は。ないように、思える」

さとり、トワがあくまで弱者として振舞おうとすることに、内心苛立ちも感じる。

また、さとりは『希少性』などと難しい言葉を使っているが、実際のところ『希少』とは『主人公を好きな、人ならざる存在』のこと。つまり、自分とトワのことである。

確かにそういった意味において、トワは非常に貴重な存在と言える。

さとりには、トワを使って試したいことがあった。

〈さとり〉

【「わずかに苛立って」

……選択肢？

【「一見落ち着いているが『わかっているんだぞ、舐めるなよ』と脅すような態度。さとり自身、本当は余裕がない」

あるでしょう。別に弱いふりなんてしなくていいのよ。

この誘いを断って、一人で何とかやって行こうとするのも貴方の自由だわ。

……私、貴方みたいな、見慣れているの。

貴方だって薄々理解していたんじゃない？

【『『そういうの』とは『人ならざる者』を指している」

この街には『そういうの』が集まりやすいのよ。

そしてあの子は……こんなところに生まれてしまった、何も知らない、ただの親切な一般人なの」

〈トワ〉 ※加工した声

「わかつた。アナタ、に、従う」

〈さとり〉

【声が先ほどまでよりも穏やかになる】

……そう。賢明ね。

いいわ。貴方を助けてあげる。

対価として、一人で生きていくくらいの知恵と身分は授けてあげるわ。

しばらく時間はかかるでしょうけど……。

きっと、貴方がここへ戻ってこられる頃には。

私の手を借りなくても、あの子にもう一度会えるわ」

〈トワ〉※加工した声

「具体的。には？」

〈さとり〉

「あら。積極的ね。

……よっぽどあの子が好きなのね。

じゃあ、どう利用されるのか教えてあげる。

※セリフ前に、息を吸う音をわざと入れ、セリフを始める前に少し間を空けて下さい

【本当はこの話題を口に出すだけで泣きそう。しかし、努めて落ち着いた態度をとる。出会ったばかりのトワに、弱みは握られたくないと思っている】

私の実験に付き合ってほしいの。

私はそうしたくても……絶対にできないから」

セリフの後、十秒ほど風の音が続き、フェードアウトしてトラック終了。